

沙翁の墓に詣づるの記

一

戊辰年八月十六日の春、四月の央でもあつたらう。ウッドストック街道からオックスフォードの北の宿はづれに差しかゝつた、二十二三の旅人がある。疲れた足を停めて今宵の宿はと見廻すと向うに何某のインといふ古風な、蕪なんどの這ひかゝつた旅籠屋の土壁が、今しも薄れ行く春の日影を一杯に浴びて、あかゝと照り榮えてゐる。

北の都會からロンドンへの街道筋とて、此邊は殊に上り下りの人馬繁く、宿屋の門には、朝夕の送り迎へが賑やかに見られる。インの狭い階子を昇つて、明りのついた取りつきの部屋に這入ると、茲は石入の厚い叩き壁に古色ゆたかな、天井の低い、小さな、穴倉の様な室である。四月といつても北歐羅巴の夜陰はまだ薄寒い。ストーヴには焚火が今丁度燃え上つて、マントルピースの上の燭臺の明りが却つて心細い。

椅子をストーヴに近く引き寄せ、手を拱いて、默然として燃え立つ火影を見つめゐる、旅人の面は赤く輝いて、額の廣いのが目立つ。

折から靜に扉を押して這入つて來たのは、此の家の娘であらうか、十八九ばかり。客は不圖瞳を舉げて其の方を見た。娘は面はゆげに顔を背けて無言のまゝに晚餐のテーブルを調へやがて出て行かんとする。

「姉さんは此の内のお娘御だね。」

「どうですか。」

「まあ、聞きたいことがあるから、お坐んなさい。さあ此の椅子に。」

「有りがたう。何ですか、聞きたい事つて。あなたはロンドンへお出でなさるのね。」

さう。ロンドンへ行くのだが……。其のロンドンがね……」

「結構ですわ。わたしも來年の誕生日は、ロンドンの伯母の處で爲る筈ですが、來年といへばねえ、随分待ち遠いこと。」

「あゝあ、ロンドン！そして何ぜさうロンドンへ行くのが嬉しいのだらう。」

「何ぜつて、それはロンドンですもの。わたしの從兄妹だけでも三人居りますし、其の中のフレッドといふのは、去年の暮も此處に來てゐました。男には珍しい程美しい眼を持つてゐて、そして唄が上手で……。それは善い聲ですよ。」

うつとりして、目のあたり其の唄に聞き惚れてでもゐるかと思はれた時、入口の戸をコンコンと叩く音、メーリーと饒しき呼び聲、イエスと軽く答へて、女は立ち去つた。

「あゝ！戀だ！戀を求めてロンドンへ行く。あれで人生が濟めば仕合せなものだ。自分は何を求めてロンドン三界へ迷ひ出るのであらう。

自分だつて故郷には戀もある。夢もある。その故郷に住みかねて、行く手は雲のはる。是れから浮世の波風と戦はねばならぬ、前途の闇の明け方は、空に明星か、海に眞珠か、望みの的はあざやかに我が手に落ちようか。それともロンドンの大路の塵にまびれて、一代をすがれ行く荷馬の如く、死して跡なくなるであらうか。天使の様なあの乙女が身は成程光明に包まれてゐる。それに照り合はせて、今さらのやうに我身の謎が目につく。此の謎の解き場は

ロンドン。あゝ、ロンドン！」

と獨り思ひに耽つた旅人は、翌朝、オックスフォードの町を越して、重ねて南へ」と旅を続けた。

我れには此の弱き旅客の名がウキリアム・シェークスピアであつたらしく思はれる。

二

山の懷、水の畔と、地上の住ひは廣いが、こ英國のロンドンから西北へ百マイル許り、エヴン川の岸のさゞ波に夜毎の夢を洗はする、スツラツフオードの片隅に、方五間には足るまじき一地进行してそこを長へに世界の眼目とし、そこに不滅の靈火を點じた、造化の寵兒シェークスピアの家は、まことに人の世の譽れかな。大英國は縱し亡びても、シェークスピアは亡びぬ。此の一地域ありしが爲に永劫不壞なる英國も亦た幸ひではないか。

ロンドンに出でしより後のシェークスピア、殊にも其の著作ありてより後の彼れは、千の傳記、百の考證よりも、彼れみづからの書こそ最も明白に之れを傳へて居る、『ハムレット』『マクベス』の著者は『ハムレット』『マクベス』の著者として天日の輝くが如く通く後昆を

照してゐる。これに想像を加へんには既に餘りに煌々たるに過ぐるであらう。唯我が最も想ふは、スツラツフオード、オン、エヴンの一青年たりしウキリアムが身の上である。

斯やうな思ひ出に導かれて、我が初めてスツラツフオード、オン、エヴンの土地を踏みしは過ぐる年の暮、某月某日であつた。オックスフォードから汽車で二時間か程、巴旦杏の花の暖に赤い家幾つかを過ぎて、停車場近く來れば、かしこに見える一群の樹立が、早やホーリー、ツリニチーの森といふに、何となく心ときめく、繁みの色はまだ調はぬながらの蒼き、中央から肅然として立ち上つたる尖塔は、げにも黙して天をさす指の如く、其の深い意義をば、唯感涙あるものが測り得よう。停車場から新開の道を病院の前に出で町に取りかゝると、もうそこに行き當りがある。廣い四つ辻の真中にしつらへた噴水はいま様ながら、町は何所ともなくさつぱりとして優雅の趣を具へてゐる。店の構へ看板の工合などまでも唯の町ではないやうだ。右手は商人宿で向うに農作物の店が見える。あの店？ シェークスピアの父の店も盛んな時はあんな風であつたらう。見れば店先に子供が遊んでゐる。ひよつとするとあの子

の顔がシェークスピアの幼顔にでも似ては居まいか。と用もないに其の間近まで行きかけると、子供は外國人を見て逃げ出した。馬鹿らしいとは思つたが、いや併し、此のあたりは、古來交通が薄く、血統が單純であるため、面相がおのづから類似型を有してゐると聞いた。シェークスピアの面相にはスツラツフオード型といふものが過たず現はれてゐるといふ。さすれば今の子供に彼れの幼顔が寫つてゐまいにも限らぬ。も一度跡をつけて見ようか。

など忙しき空想に耽つてゐるあひだ、時は午に近くなつた。地圖によると、此處から向うの角の小路を抜ければ、すぐ其所がヘンリー、スツリート。シェークスピアの舊宅の残つてゐる所である。と思ふと飛び立つやうには感ずるが、先づ宿を取つたと上と、大橋通りのゴールドン、ホテルといふを探した。廣い通りを眞つ直ぐに辿ると、幾らもあるかぬ内に早や、橋が見える、其の下はエヴン川であらう。町はこれである。ホテルは橋のすぐ手前であつた。

三

旅行の季節として、ホテルの客室は凡て約束

濟、よつて是非なく近所の室内裝飾品を賣る家の一室を借りさせ、食事だけはホテルに來てすることとなつた。食事はひとり後れて調へたれば、食堂の模様などはまだ見ず。兎も角もと、近まのヘンレー、スツリートへ先づ駆けつけた。

あれがシェークスピアの生れた家といふ、其の前には成程多勢の人が入場を許されるのを待ち合せてゐる。また此方の軒下には馬車の客待ちをしてゐるものもある。併し斯う見たすと、さして長くない通りながら、何となくからんとして、人の往來も少ない、如何にも田舎の小町といふ趣である。折しも空には薄雲が掛つて冷氣を含んだ風が町を吹き渡つて來た。何だか淋しいやうな悲しいやうな風情である。

想像して見ると、シェークスピアがまだ腕白盛りの頃は、例のグラムマー、スクールに通ふ朝夕の途すがら、弟と肩を組んで、此の邊を行きつ戻りつしたものであらう。そして年より老せた彼れは、十六七にもなると、もう一廉の若い素氣取りで、日本ならば湯歸りの手拭を肩に、つつかけ下駄か何かでそこらをそよりあるく方であつたらう。いや彼れは案外におとなしい質で、朋輩からは若年寄といふやうな綽名を

つけられてゐたかも知れぬ。父が家産の傾くにつれ、生活の辛苦は早くもこの大天才が青春の夢を餌みそめて、弟と共に商品の買出しから偶には得意回りもする、稼業の手傳に追はれて好きな雜書にも讀み耽る暇は無くなつた。夜遅く店を仕まつてから、僅かに自分の寢室で覺束ない蠟燭の光をたよりに昔の心ゆく唄の本などを讀んでゐると、其の明りが、あの今見える東北角の窓から微かに漏れる。

頃しも秋の末、月も無い霜夜の事であつた。シェークスピアが優しい情を忘れかね、八つのお姉でありながら、我れから戀をして、深くも彼れと契つたアン・ハサウエーは、三月の身重く、寢た様の目につく頬を風に吹かせつゝ、窓の明りを心あてに、そつと寄ね寄つて呼び出せば、男は心得て忍び出づる。つれ立つて指して行つたはあの橋の袂、アンが身の始末を二人しみじみ泣きつ語りつしたであらう。

氣がさして、ふと橋ある方を見かへれば、二人の後姿にはあらぬ一群の男女が、アメリカ音に語り興じつゝ、此方を指して來かゝつた。

四

げに世界の如何なる處にも見がたい偉觀は、

此の僑屋の一隅シェークスピアの誕生室であらう。金字に雕られては、帝王の書架をも飾る文學史上の大名が、見よ、此の一室に來ては、如何に賤小に、如何に謙抑に、窓、壁、天井に其の跡を留めて居るかを。説明係の男が、一葉の薄紙を窓の硝子に當てて指し示す所を見れば、縦横に切り込みたる名字の中に、鮮かにスコットの名も見られる、カーライルの名も見られる。天井にはブラウニングの名が切つてある。そして此等の人々は、此の室の主人の前には、一切の地位階級を棄脱して、無名微賤の巡禮者として讃仰の意を主人に捧げてゐるらしい。

其の外に、いはゆる何人も一度は腰かけて見る記念の椅子。我が其の側に立つて長々しい説明に耳を傾けてゐる間、傍にありし一老一婦、そが娘とも見える妙齡の一婦人とは、先づ紳士から始めて試みに其の椅子に腰を託した。

「シェークスピアは、さう太つた男であつたとも思はれんが、私のやうなものしばし腰をかけると、成程是れでは脚も減りさうぢや。はつは。見物人が腰をかけるために椅子の脚が減るといふのは、丁度あのカンターペリーのお

寺で、巡禮禮拜の膝を突くために石段の中段が
間んでゐるといふのと好一對の談ぢやな。さあ
お前の番ぢやぞ。」
娘は輕く周圍の人に會釋して、しとやかに身
を落した。

「お父さま、似合ひまして？」
と心持そり身になつて見せる。

「うむ、クキンぢや。」

「ほゝゝ、文學の玉座に直つたのですもの。」
と父と我れとの方を等分に見て立ち上つた
が、父の側に寄つて「日本の紳士を。」とさゝやい
た。すると老紳士は我が肩を叩いて、

「さあ、あなた、一つ腰をかけて御覽なさい。」

我れも同じ道に心を寄するもの、縁なればと
そと、人のする通りを爲て見た。續いては、シェ
イクスピアの指輪、シェイクスピアの印形、
シェイクスピアの肖像と、確否は知らねど、斯
かる場所には附き物の遺物の數々を巡覽して、
再び町に出る。

五

大通りに出て、シェイクスピアが専ら羅
典の知識を得たといふグラママー、スクールの
前からホーリー、ツリニチーの寺地まで、殆ど此

の土地を離断しても、三十分とは、いゝらぬ。
町の周圍に散在する、菅笠を伏せたやうな丘、
其の間に廣がる牧場、島、立木は楡、柏、山毛櫸、
水松の類が多からう。總じて緑の廣い縁をつけ
たやうな瀟洒たる小都會、その東南を限つて流
れるのが、可憐なエヴン川である。

春であつたからでもあらうが、打ち見た所、
町の雅趣あるに對して、四圍の色調は青いとい
ふよりも緑である。いかにも若々として、新鮮
の氣は野に森に漲つてゐる。華やかな日光が
青緑のやうに透ける青葉の蔭には、水の乙女、空
の乙女が踊つてゐる、あのコロの繪にでもあ
りさうな趣。我は曾て、初めて鎌倉に膝を探
つた時、先づ其山色のいかにも歴史と相呼應し
て蒼古の調を帯びてゐるのに魅せられた。其の
土地が有してゐる内容と、之れを覆ひ包んだ色
調との間に、自然の調和があるのを面白く思つ
た。然るに今スツラツフオード、オン、エヴンに
來て見るに及んで、そこに一種の、意義ある對
照を認める。鎌倉三代の歴史は、如何にドラマ
チックであつたにもせよ、畢竟歴史である。其
の調は茂古老蒼を加ふるに従つて愈々妙を増
す。スツラツフオードの内容は詩である、藝術
である、シェイクスピアである。年時を忘れ

て常に清新に、常に快活にして、却つて同類
の情を深うするではないか。歴史は老いよ、
藝術は長へに若くあれ。」

寺の門は、幾、百年の菩提樹道の兩側に列を
正し枝をわたして、青葉の天蓋を引く。左右に、
楡の葉蔭ひろく廣も留めざる一面の墓地は、凡
ていはゆるホーリー、ツリニチーの神領である。
その楡の木隠れから、遙に尖塔の頂のみを示
して、人をして理想の情に堪へざらしめた聖院
は、今や、菩提樹の若葉香る穹道の奥に扉を見
はして來た。我より先に、遙か離れて行く小
い人影は、黒い外套と空色の絹服と男女二人
の後姿、天國の門を叩きにでも行く人かと思
はれる。

入口には黒き法衣の僧がゐて、出入を取締り、
入場料も取れば、案内記、繪葉書、記念印紙の
類も賣る。之れも寺の維持費と思へば故障はあ
るまい。

さて建立の由來、建築、窓、繪の説明はざつと
聞いてつか／＼と香壇の前に進めば、此處であ
る、欄を隔てて右より二つ目の床石の銘は、
善き友よ、耶穌の願なり、止めよ、此處に
納めたる塵を發くことを。幸ひあれ、此の
石を庇ふものに、將た嘆ひあれ、我が骨を

移すものに。

三百年のあひだ、斯くの如き銘を負うて静かに眠つてゐる大詩人の骨は、今後といふとも、彼れが著作の亡びざる限り、永劫に亘つて動かさるゝことはあるまい。思ふに敢て此の願ひを亡みせんと企つるものがあつたら、世の憎み禍ひは必ず其の頭上に集まり來るであらう。墓の主が遺したる呪詛の祈りは、夫の古の豫言の如く事實となつて功力を現はし來つたと言はずばなるまい。

右手には、之と并んで妻アンが墓、左には三つ相續いて、娘マサンナ及び其の夫等一族の墓がある。

回顧すれば我が初めて學窓にシエークスピアを習讀して以來、殆ど十年、しばしば想像の間に出入してゐたスツラツフオード、オン、エヴンの地、別けても彼の銘を刻んだ詩人の墓を、今日のあたりに見て、我れは眞實我が身の此の境にあるかを疑ふの情に堪へなかつた。

けれども、斯やうにして墓前の欄に手をかけたまゝ、しばし茫然たる胸の底から湧いて來るものは、一種の喜悅光明の情であつた。伽藍の中は取りわけて空氣がひやくとしてゐる。光線は色硝子に透けて明るさを減ずる。場所

は人氣の少い寺院の而も十字架像の前である、それにも拘らず、此の時の我れは、千古の詩人が冷に骨を横たへてゐる傍に立つて、一種の溫さを感じた。嗚呼茲にこそシエークスピアの靈は安まれと思ふに、おのづから、肅然として容を正しするの氣は生ずれど、されど哀傷の心、寂寞淒愴の情は絶えて萌さぬ。むしろ愛慕の感、同悅の感、光明の感が身邊を圍繞するやうに思はれた。由來英雄の追懷は如何なる莊嚴美麗の形に於いてするも、畢竟生時の燦爛と死後の變易荒廢との對照に外ならぬ。玉壘浮雲、無主の江山、何れか廢墟を傷み荒殘を哀しむの情でなからう。所詮英雄を弔するの意は荒廢を弔するの意である。而して斯くの如きは亦實に現人生を弔するの意味ではないか。人生は到底其しりへに變易を豫想し廢滅しなければ、深切の感味を發しない。ひとり我は今、詩人シエークスピアを弔せんと欲して此の以外のものに達着した。彼れの追懷は繁榮である、光明である。而して夫の藝術の追懷もまた茲に歸するであらう。滅び行くは人生の姿、之を暫く天上不滅の光に照して示すものが藝術ではないか。さればいふ、「人生は常に荒廢也、藝術は常に繁榮也」と。

六

後年巴里にナポレオンの墓を訪うた時は、其の構造の如何にも壯麗を極めてゐるに拘らず、金粉榮華の底に、堪へられぬ程の淋しき物悲しきを感じ、憤然として寺を辭したが、シエークスピアの墓に詣でては、我れは覺えず笑みの眉を開き、和親の面を輝かして、周圍を見まはした。

ホールに、ツリニチー、バストと言つて此の寺にある半身像は、世にあるシエークスピアの肖像中でも最も古いと信ぜられるものの一つである。是れからそれを見しやうと、振りかへるはずみに後から聲をかけるものがある。誰れかと見れば曩に誕生室で會つた老紳士親子であつた。

「あすこにあるバストを見落しちやいけませんぞ。」

成程像はすぐ香壇の横、我等の左手の壇盤に安坐してゐる。床から數尺の上に、黒い大理石を彫り穿め、同じ石のコーンズ式圓柱で左右を裝飾した龕中に半身をあらはしてゐる石灰石像が即ちそれで、本來は赤の上衣に黒の袖無しガウンと、粉塗の跡あざやかであつたといふ、

その服装は人のよく知る通りである。左に紅、右に鶯ベンを持つた手は臺の上にきゝへられて像の下には夫の「停まれ行人、何と御身然は急いで行き過ぐるぞ。」云々の文句を彫つた石が嵌めてある。

「お父つさま、此の像をよーく見つけてゐますとね、笑つて来ますよ。それ御覧なさい、ね。」

と眼は我れの方を見ながら、娘がいふと、

「あ、それは此の像についての有名な話ぢや。是れはもと墓作りのジョンソンといふ土地の石工が刻んだもので、一つは据ゑやうが心持高過ぎるからでもあらうが、あの通り顎は二重顎のやうで、顔が總體下から見上げた形になつてゐる。御覧なさい、日本の紳士、唇が少し開いて齒でも見えさうではありませんか。あれが此像に特殊の表情を與へて、愛くるしい子供のやうな所が見えるのぢやと言ひます。」

「いかにもさうのやうですね。そしてあの眼と眉とがまた……。」

「さうですよ。わたしもさう思ひますの。何か斯う向うに見詰めてゐるものがあるやうですわね。」

「さうです。何か普通の人には見えないものを、はつきりと見据ゑて、寫し取らうとでもし

てゐるやうではありませんか。おもしろいですね。」

「いや私の考は少し違ふ。あれはアブストラクト・アイといつて、深く思想を一事に集中してゐる時の状態ぢや。眼は明いて居ても何も見當をつけて見てはゐない表情ぢやと思ふ。私には寧ろ何か我々には聞えぬ靈妙の手樂どもを、耳で一心に聞いてゐる時の眼と見えますな。」

「それはお父つさま、考へやうですけれども、若しあれが耳の方に氣を取られてゐる眼なら、今少し上を向くか下を向くかして欲しいと思ひますわ。」

「私もどうも其の方の説に賛成したいですね。あれをアブストラクトの眼としては、ちと意味があり過ぎるやうに思ひます。」

「さうかな。私にはどうもさうは思はれんが、併しこんなことは主觀的な所の多いものぢやから何とも言へん。」

と和して同ぜざる英國紳士のゆかしい氣質を見せた老人は、更に言葉をついで、

「それであなたは此の像に對して全體に何ういふイム・プレッションを得ましたか。」

「さうですね、それは、ちやうど今の前私が此の墓石を見てつくぐと感じてゐた所と一致した

一つの感じですが、言はず藝術は如何なるものをもブライトにする、藝術の標徴はブライトネス、プロスベリチー、プレジエラブルネスといふやうなもので、シェークスピアの此の像は、よく此の事實に結論を與へてゐるやうに思はれるのです。わたしのシェークスピア觀及び藝術觀の一部が此の像によつて完結せられる、と云へば少し大層なやうですが、まあそんなものです。お嬢さんのお考はどうです。」

意外の見識に驚いたといふ風で、我が方を見つめてゐた娘は、あわてて眼を外らすと共に、其の縁をさつと紅めて、

「わたし、あなたのお説にすっかり賛成ですわ。」

「ちや多數決ぢや。しかたが無い。どうです、是れから墓地を見ようではありませんか。」

紳士に導かれて戶外に出た。

七

崖に沿ひ寺を圍んだ廣い墓地には、櫨の大木が所々に蔭をなして、細工を凝らした花壇や、硝子箱に入れた造花の仰々しい新墓の脇を通りすざれば、青苔に埋もれた古い墓、試みに手で拂へば、木蔭の露がしと滴れる。地は一面

に掃き清められて、塵一すちも落ちてはゐない。時々さらゝの音を立てるのは、エヴン川を渡る微風には、楡の葉の摺れるのであらう。川向うの牧場からは、稀れに牛の鳴く聲が聞える。墓地を一巡して川に臨んだ小高い土手の上に、出れば、木の下に共同椅子が据ゑてある。三人は之れに腰をおろした。見渡す限り、エヴン川は、水嵩ゆたかに牧場の草の根を浸して、漣波の果遠く、もとは一面の葦の繁みであつたといふ小島の跡に續く。別けてゆかりは此の川の白鳥である。ベン、ジョンソンがいはいゆる「エヴンの美しき白鳥」こそは去つて繼ぐものも無けれど、まだ肌寒い川風に羽を揺く鳥の風情は、今も昔のままであらう。

「あすこにシェークスピアが。」

といへば娘は崩れるやうに笑つて、

「スキート、スワン？」

「此の白鳥はスキートであるか、どうぢやらうか、わからんな。」

「わたし、向うの牧場へ行つて見たいのですが……。」

「もう茶の時刻ぢやらう。一旦歸つて、茶でも呑んでからにしてはどうぢや。あなたも御一緒にお出でなされてはどうです。まだ御名前も存

ぜんかつたが、お名が何はれませうか。」
我れも名刺の交換を乞うて宿所を聞くと奇縁か、同じホテルの相客であつた。されば論もなく同道して四時といふに、ホテルの食堂で茶を共にした。紳士は愛蘭土の者で身分ある人であるが、妻を失つて、娘一人をたよりの身であるといふ。血の冷熱の激しいアイヤリツシュの所は少く、却つて英蘭土の氣象を多く持つてゐる。

八

ホテルの客は二十人の上に出でて、食堂は中々の賑ひである。我等は今一人亞米利加に育つて、獨逸に長くゐたといふ、五十左右の元氣な婦人を加へて、四人片隅のテーブルに席を占めた。

今日の話題は、自然のこと、あちらでもこちらでもシェークスピアで持ち切つてゐる。亞米利加の婦人は盛んに獨逸が文藝の國であることを説いて、シェークスピアは本國たる英吉利よりも却つて獨逸に多くの眞知己を有してゐると主張した、そして英國が此の大詩人を表彰することの尙足らざるを慨した。彼方のテーブルで一際高くペーコンといふ聲がすると、それを

捉へて、この饒舌博識な婦人は、さらにペーコン、シェークスピア論に移る。

「おゝ馬鹿々々しい。先達ても或る書物を見ると、二人の名を一つにしてシェーコン、ペークスピアなんて書いてゐました。そして言ひやうが面白いやありませんか。一つ此の際に折衷案を立てて名をペークスピアと改めたら善からう、眞理はいつも中庸にあるから、ですとさ。人を馬鹿にしてゐるぢやありませんか。」

「ではあなたはシェークスピアとペーコンとは全く別人といふお説なのですね。」

「勿論ですとも。まあ、考へても御覽なさい。『學問の進歩』を産み出した頭が、どうして『ハムレット』や『キング・リア』を産み出します。『學問の進歩』と『ハムレット』と、どれ程違つてゐるかといふことが分れば、跡は議論をするまでもないぢやありませんか。ペーコンのやうな、あんな羅興狂、活字引、論理機械が、どうして

どうして、シェークスピア、ソネットの、唯の一句でも作れたら世界の不思議でせうよ。是ればつかしはわたしが……。」

と鼻息あらくテーブルの上から手を引くはずみに、飲みさしの茶をひつくりかへした。ミルク入りの灰色のものが白いテーブル掛を浸し

て、スカーツに流れかゝる。あわてて立ち上らうと椅子を後へ押せば、後の椅子とからみ合つて此所にも一騒ぎ、給仕人を呼ぶけたまはしい聲、あちらの方ではくすくす笑ふ聲。我等は總立ちで急いでハンカチーフを取り出し、婦人の前の洪水を防いでやつた。座が静まると、日本のシェークスピアは誰であるかといふやうな話から、老紳士は、愛蘭土の人が往々人種上の偏見に驅られて英蘭土と反目せんとする結果、シェークスピアにまでも冷淡なのを非難した。

「さうですね、今英國でシェークスピア反對の旗頭はお國のバーナード・ショー氏だといふことですね。」

「恥です。わたし、あの人は大嫌ひ。書いたものを讀んで見ましても、何だか冷たくて、皮肉で。」

「あれは佛蘭西の系統ですよ。佛蘭西ではあの通りヴォルテヤの昔から、今のサードウに至るまでシェークスピア嫌ひが多いのですからね。なかに佛蘭西人などにシェークスピアが分るものですか。一體ケルト人種は……。」

「いひかけて、婦人は氣が附いた風に、跡を引き込める。座の白けるを恐れてか、娘は先づ

立ち上り、老紳士もつゞいて立つた。

九

夕暮前の一時間許りは、橋を渡つて、川向うの牧場、近郊などをそぞろあるきした。娘が、持つて来た菓子をしきりに白鳥に興へてゐるあひだ、老紳士は岸づたひに水下へ下つて行く。我れは立木の幹に倚つて眺め、川の景色を見てゐたが、心は何時かまた空想に這入る。

此土地の風格の、何とはなく清らかで、情ありげなのは、畢竟この川あるが爲めであらう。シェークスピアと、エヴンとは、土地の命である。若しあの白鳥がシェークスピアの靈であつて、それがエヴンに浮んでゐるとすれば、其の關係はいよゝ面白くなる。

など考へてゐる間に娘はそこらで一つまみの櫻草を摘んで来て、笑ひながら、之れを君に捧ぐるの名譽を許したまへ」といつて我が胸の左の鎖穴に插んだ。

「何を考へていらしつて？」

「今妙な事を考へました。あの白鳥がシェークスピアの靈ではないかといふ……。」

「ほゝ、あなたも迷信家ですこね。」

「迷信といふ譯でもないのですが、今日午にも、

あのシェークスピアの家の窓を見てこんなことを考へた。夜遅くある窓から明りが漏れてゐると、アン・ハサウエーが村から尋ねて来て、そつとシェークスピアを呼び出して、この牧場の邊から舟でも出して夜中月の下に身の振方の相談をしたのではないかといふのです。」

と言つて不圖見ると、娘は赤面して俯いてゐる。是れはしまつた、アンが身の振方といふ裡には、私通の懷胎といふ疑が籠つてゐる、デリケート、センスの淑女紳士の前では言ひ及ぶまじき事柄であつたと思つたが追つたか。話題を轉じようとしてゐるうち、娘はボツケツトから美しい袖珍本を取り出し、

「わたし、シェークスピアのソネットを持つて來ました。二人で讀んで見ようぢやありませんか。さあいらつしやい。此所がようござんす。」

みづから草を敷いて席を造つた。歌の中から

は、所々會心の章を引き出して、自分も誦し、我れにも讀めよと勧める。我れに朗讀を追つて抑揚の正しからぬ箇所をば一々直して呉れる。

はつきりしなかつた夕日が、ばつと一時に榮えて沈みそめると、川づらも遠くから鶴の暮を

引いて来る。と思ふ途端に流れに沿うて一般の端艇が下つて来た。漕いで居るは二十歳ばかりの若者、情人でもあらうか、一人の若い女を載せてゐる。我れは之れを見ると、何となく心とどろいて立ち上つた。シェークスピアとアン・ハサウェーとが話の繼ぎめを、また思ひ合はせたのである。すると娘も同じ電氣にでも感じたかのやうに、まじろいて身を起した。端艇は過ぎて行く、そして遠霧の中に没してしまふ、岸にはあゝとの嘆息のみが取り残された。

しばらくして、娘は、

「シェークスピアが此の土地に居られなくなつたのは、サー・トーマス・ルーシーの著つてゐる鹿を盗んだからだと言ひますが、わたしは何だかそれにはシェークスピアに言譯がありさうに思はれます。」

「さあ、それはどうとも言へないやうですね。」といふとき、老紳士は後の畠道から歸つて来て、我等の傍から口を挿んだ。

「私の讀んだ範圍での傳記によると、よし盗んだにしても、それは半分は習慣、半分は徒戯ぐらゐのものではなかつたか。『盗んだ』といふ語が餘り強から、彼れを呪ふやうに聞えるのぢやらう。そんな例は今でも田舎にはよくある事ぢや。」

や。それで私はシェークスピアの此の事件に關しては、一種の哲學を立ててゐますよ。」

「おもしろいですね。どんな哲學でせう。」

「倫理上では善と惡との中間に無善惡の事柄があるかどうかといふことは既に人も論じてゐる所ぢやらうが、私は其の外に幸善惡といふやうなものがあると思ひます。シェークスピアの場合が丁度それぢや。盗んだは盗んだがそれは普通の盜賊が夜陰に他人の家へ忍び入るといふたぐひとは、心持が違ひはせんか。土地の若い者等がよく自分の庭へ紛れ込んで来た鶏を締めて喰ふ。又は通りがけに葡萄園の葡萄の房を摘んで行く。是等は田舎の習はしによくある事ぢや。行る者は悪い事とは思はぬが、さして悪い事とも思はぬ。徒戯をして叱られるくらゐの心持で行つて居るのです。シェークスピアの鹿の事も事實なら恐らくはこんなものぢやつたらう。それをルーシーが意地わるく咎め立てをしたのでせう。あなたはどう思ひます。お前もどう思ふ。」

我等はちよつと答へかねたが、娘は満足の體に見えた。

オックスフォードのインで見た時直接に彼れに質して見れば好かつたと不圖考へて、思

直せば、何の事、それは平生我が空想から造り上げてゐる夢に過ぎなかつたのである。

ホテルへ歸る途々も、娘は、かの舟の事が心にかゝると見えて、月の冴えた夜、自分等も、エヴン川に露座するまで筆を分けて、シェークスピアの歌の本でも讀んで興をふかして見たいと繰り返して言つた。けれども今は生憎月が無い。明日は早や三人ともに此の地を去らねばならぬ。我れも月のエヴンの舟遊びは期してゐたのであるが、此の度は齟齬して了つた。明月の一夜を、露が骨身に冷え徹るまで此の流れに上り下して、或時は牧場の岸に舟を寄せ、或時は寺に沿うて木蔭にしばし繩をかける。耳を澄ませば彼方の牧場には銀絃を弾くやうな龜の聲、寺を周つてさゝやくものは、榆や菩提樹の葉に戯れる風。あゝ此の時、願はくは舟に樂手の乙女あれかし。樂器はワイオリン、曲は戀、泣かずに已みがたい興趣であらう。

而して東海の一後進が捧ぐる愛慕の歌に、詩人の夢も涼しめられよう。

十

オックスフォードのアイシス川の月も美しい、来て見られよ、といへば、さらばパーミン

ガムよりロンドンへの送すがら必ず立ち寄り
す。彼處で月の思ひは果させ給へ」と、言葉をつ
がへて、夕食の後急に親子はパーミンガムへ
と出立した。我れも翌日は見残したものを
見、此の靈地を辭した。

* * * * *

越えて數日、一封の書狀によれば、彼の老紳
士と娘とは、遂にオックスフォードへは立寄る
機會がなくなつた、残念との事である。そして
スラツフォード、オン、エウンの一日の記念は
永く消えざるべしと書いて、末に當日讀んだ
ンネツツの一節が抄してある。

When to the sessions of sweet silent
thought

I summon up remembrance of things
past,

I sigh the lack of many a thing I
sought,

And with old woes new wail my
dear time's waste :

.....
But if the while I think on th e,
dear friend,

All losses are restored and sorrows
end.

歌はおもしろいが、思ひ出は淋しい。噫、我れ
は記憶が、藝術は悦びか。」（明治三十九年四月）

四十歳

二十歳が所有してゐるすべては Love であ
る。三十歳にはまだ其の色香は残つてゐる。
併し肉の方がまじつて来る。最も花やかなの
は巧名の心である。

四十歳にはもう Love は無い。たゞ其の追憶
がある、羨望がある、悔恨がある。巧名の
心にも、最早空想の花は咲かない。不安の影
がさす。

Love と Ambition の殘軀！四十歳のすべて
には臆病な打算の心が息をしてゐる。

四十歳に至つて、無邪氣を暗示する顔の筋肉
が全く隠れて了ふ。表情の何處かにふてふ、
しい、物凄ゐ線が浮び出て来る。呪ふべき四
十歳。

（「題辭」46）

チューゼ及サラ・ベルナルの マグダ

ブーダマンみづからも、チューゼのマグダを
見なかつたら、自分がどんな風に書いたのだ
か知らなかつたかも知れない。チューゼのマ
グダを見たら、前に見たサラ・ベルナルの
は記憶から消え失せて了つた。もつとも貴婦
人訪問の場と初めて牧師と話して大笑する場
とはサラの方がよかつた。

今一つ印象を残してゐるのは、ケラーを戸外
へ遂ひ出さうとする場で、齒を喰ひしはり虎
のやうな唸り聲をする得意の藝である。併し
チューゼはそれに比べて如何に單純に、如何
にいきと、如何に意味深く、あの言ふん
からざる侮蔑心の閃きを唯一句に現はし得た
ことよ。此の第三幕の終りに於ける時ほど英
國の見物が魂を奪はれて了つた例は嘗て見
たことがない。

（「題辭」47）